

<今回>284回目 2020年10月26日(月)15時~18時 602号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p221、第3章 高句麗王碑 より

<前回>283回目(20-10-9) 出席者 8名

資料(20-10-09-1)前回のまとめ(清水)

-2) 予定表(来年3月まで)

-3) 八岐大蛇を切った十握の剣(高山)

A 報告 10月9日午前10時から「多元の会」の藤田隆一氏の Skype ソフトでビデオ会議3回目が出来た。今回、高山氏の資料(石上神社の禁足地から出土した経津の御霊など)を自分のパソコン内の資料として読書会での七支刀の新事実の一つとして紹介した。藤田氏から石上神社に行ったときの禁足地の映ったビデオが紹介された。剣と太刀の使い分けがあるのか質問があった。尚次回から(毎週金曜日 10時から)藤田氏が「百濟禰軍の墓碑銘」の解説をあと3回おこなう(漢文の読み方中心)。2011年朝日新聞報道、まだ完訳はない。初回は百濟禰軍は中国から戦乱を逃れて百濟の地に移住して4代(系図が紹介)、軍人として仕え、百濟滅亡時に唐に降り、白村江の戦いの後に新羅と唐が戦った時、唐の將軍として戦い、負けて捕虜になったがその後唐と新羅が和解したとき唐に返還され、今度は郭務悰と共に唐の將軍として倭に来たことが日本書紀にある(678年)。

B 資料 2) 日程表 3月まで予約表。3) 十握の剣の資料(高山氏)は5年前(N.15-05-22-2)に紹介されたものであるが参考になると思って再配布した。関連する伝承、社伝など整理されている。

C 読書 p210 四 途中 11行目から

- 1) 宋書は斉の武帝永明6年(488年)勅令により完成した(著者沈約)5世紀に作成された同時代史料である。
- 2) 金錫享は自分の「分国論」の文献上の大きな支えとしながら、反面都合の悪いところは極端な不信主義をとる。例えば宋書内の新羅の欠落を無視して、ほら吹き倭武という事で宋書内の新羅の空白を気にしない。
- 3) 毛人と衆夷 通説は倭の5王は近畿天皇家としてきたから東の毛人は関東から東北、西の衆夷は中国、四国、九州と地理的に自然という(蝦夷と熊襲)。②西夷という用語は存在するが夷は中国大陸王朝の東側の蛮族をさす。近畿大和から西を夷というのは不可解である。(海北 新羅を記紀の視点で西といているのと矛盾する)
- 4) 東は毛人 中国文献では夷よりも東に所在する毛深い民を毛という。一般に寒冷地に住む人は毛深いから自然である。近畿王権からの視点からいきなり東を夷を飛び越えて、毛としたのは中国の用字法のイメージを無視している。倭の武王の上表文は完ぺきな漢文である。
- 5) 九州に都した場合は衆夷は自ら自身としている。毛は中国四国の西半分をさしている。毛人 55国、衆夷 66国、海北 95国の数字的妥当性も大きな制約になる。(倭人、もと100余国)
- 6) 幾を遥かにす 倭王武は自分の視点が東西北を統合征服した歴史をもって中国天子の臣としての道を正々堂々行っている。幾は天子の居るところ、自分は遥か遠方で天子の為に働いていることを評価してくれという。
- 7) 秦韓、慕韓 ①通説は過去にさかのぼって、権利を主張した。②後漢書資料中に、辰韓の耆老自ら言う、秦の亡命人、馬韓の王が東界の地ををさいて与える、5世紀現在の事実で秦の遺民説には根拠があると范曄は考えた。5世紀実在説は菅政友、那珂通世、橋本増吉、坂元義植等がいる。倭5王を近畿天皇家と切り離れた学者も多くなってきた。(鶴峰戊申、長沼賢海、尾崎雄二郎、井上秀雄、など)古田はこの時点で倭の5王は卑弥呼の後継政権との論文を出していた。

次回日程 2020-11-9(月) 15時から18時 602会議室

-11-23(月) 15時から18時 1503号室